

いのちの電話物語 ～死から命へ～

原作：江見太郎

脚色：中野拓哉

演出：小川政弘

登場人物

江見牧師

江見夫人

婦人警官

小泉優子（15歳）

長谷川友彦（18歳）

白浜屋店主

< 前編 >

N 和歌山県白浜は、熱海と並ぶ日本屈指の温泉地で、千畳敷、三段壁（さんだんぺき）、白良浜（しららはま）などの景勝とともに観光地として知られています。しかし一方では、三段壁からの投身自殺者が後を絶たず、自殺の名所という悲しむべき一面をも持っています。1979年、江見牧師は死に急ぐ人々を救出するために白浜いのちの電話」を開設しました。そのエピソードはやがて”涙をもうぬぐって～いのちの電話は鳴りやまず”と言う一冊の書にまとめられました。登場する団体、人物名は架空のもので、またラジオドラマ用に編集、脚色してあります。

N 「たったひとりしかいない自分を
たった一度しかない人生を
ほんとうに生かさなかったら
人間、生まれてきたかいが
ないではないか」

山本有三『路傍の石』より

重大な決断をする前に一度ぜひお電話下さい。あなたのお力になります。

N これは白浜の三段壁に掲げられている「いのちの電話」の看板の言葉です。この看板はいままで多くの人の命を死の淵から呼び戻してきました。今回お話しする長谷川友彦と小泉優子という若いカップルもそうです。二人は、死のうとし

て三段壁を訪れ、いのちの電話を通し、見事に立ち直ったのでした。
事の始まりはこうです。二人は東北の小さな町に住んでいました。

優子の家

優子の父 おまえまたあの男と会ってたのか！いいかげんにしろ！おまえたちはまだ結婚できる年じゃない。親のすねをかじってる身で独り立ちでもしたように振る舞いおって。

優子の母 そうよ、まだ中学卒業したばかりで、仕事だってやっとさせてもらっているのに、突然いなくなっちゃったりしたら、お店だって困るでしょ？ましてや男の人のところにいたなんて！私たちの頃じゃ考えられません！

優子 どうして分かってくれないのよ！？どうして好きになった人と一緒にいちゃいけないの？お父さんもお母さんも認めてくれないから、仕方なく友彦のところに出ていったんじゃない。友彦と結婚するって約束したの。どうしてそれを分かってくれないの？

父 何を分かれて言うんだ。もう成人しているのならともかく、おまえはまだ子どもなんだ。それに、何が結婚だ。私は許した覚えもないし、許すつもりもないからな！

母 そうよ。お父さんの言う通り、私も賛成できないわ。

父 もう、おまえは二度とあいつと会ってはならん。分かったな！

優子 ……

N 優子より三歳年上の友彦は、調理師見習いで水商売の似合うどこかイナセな感じの若者でした。二人のブティックでの出会いが、いつしか恋に変わったとしても何の不思議もないでしょう。問題は二人ともまだ若すぎることにありました。一途に燃え上がった恋人同士にとって、周囲の大人たちの反対は火に油を注ぐようなものでした。これまでも優子は何度か家出を企てましたが、その都度連れ戻されました。でも彼女は「今度こそ」という思いで、友彦のところに身を寄せたのでした。

友彦のアパート

友彦 なぁ優子。また、俺のところに来たりして大丈夫なのか？俺の方いいけど、また連れ戻されるんじゃないか？

優子 今晚は大丈夫。ちゃんと友達のところ泊まるって言ってきたから。それより例の計画。チャンスよ。明日の夜までに、この町を出ないともう私たち会えな

くなっちゃうんだから。

友彦 俺は優子がいればどこでもこの腕一つでやって行ける自信はある。だから、おまえが本気だったら俺はいつでもいいよ。けどお前、本当にいいのか。この町には二度と戻って来れなくなるんだぞ。

優子 いいの。今の家にいたら、ううん、この町にいたら、絶対に私たち、結婚はもちろん、会うことだってできなくなっちゃうんだから。誰にも咎められず、誰からも気にされないところでひっそりと二人だけで暮らせれば私はそれでいいの。ううん、友彦と一緒に、死んでも構わない。

友彦 優子...

- ドンドン (ドアをたたく音)

婦警 長谷川さん、長谷川さん、いますか？

友彦 は、はい、いま。(小声で) 誰だろ？

優子 うちの人じゃないよ。

友彦 ...はい、どちら様でしょうか？

- S E ドアが開く音ガチャ、ギー・・・

婦警 長谷川友彦さんですね。私は、小泉優子さんの保護者の方の依頼で青森県警から伺ったのですが、こちらに小泉優子さんいらっしゃいますね。優子さんを保護して連れて帰るために来ました。

優子 友彦！私を引き渡さないで！その人を追い払って！

婦警 いいえ、それは出来ません。あなたたちがしていることは犯罪なんですよ。本来なら、未成年者の不純異性行為で逮捕されますし、この長谷川君は誘拐の罪にだって問われます。しかし、優子さん。あなたのご両親がそれでは若い二人の将来に傷が付くからとのことで、青少年健全育成課の私がかがっているのです。今日のことだって、ご両親は全てご存知ですよ。

優子 それがいやだっていってるんじゃない！私絶対帰らないからね！私たち、誰が何といおうと、結婚するんです。友彦、そうでしょ？

友彦 ...優子。今日は帰った方がいい。

優子 ちょっ！友彦！！

友彦 優子、いいから帰れ！あの約束は...守るから...

優子

婦警 話しは付いたようね。さっ、帰りましょう。

N 優子の両親は、それでも、一人娘のかわいさからか、手を変え品を変え優子の説得にあたりました。

優子の家

父 優子。何も私たちはおまえたちが、結婚してはいけないと言っているわけではないんだよ。せめて、おまえが成人式を迎えて人からも一人前と認められてからだって遅くないじゃないか。相手の、長谷川君といったね。彼もまだ、未成年の様だし。...おまえだって、まだまだ学ばなければならないことがたくさんあるんじゃないか。そんなにいそいで、生涯の伴侶となるかもしれない男を選ぶこともないだろ。な。

優子 そんなに私の事思ってくれるんだったら許してくれたっていいじゃない。ねえ どうしてだめなの。こんなに私たち愛し合ってるのに。

母 ねえ優子。そんな事言わないで、お父さんの言うとおりにしてちょうだい。母さんの一生のお願いだから。ね、ね。

優子 私だって一生のお願い。

父 お前はまだ分からないのか！わかった、明日から、婦警さんに面接に行く以外、外に出なくていい！いや、出てはいかん！仕事ももう止めるんだ。お前がそんな事言いださなくなるまでだ。分かったな！！

N それから数日後、優子は婦警さんの面接と偽って出かけたまま、町から姿を消しました。その前日、友彦もまるで打ち合わせたかのようにアパートを引き払っていました。彼女の部屋の机の上には、婦警さんとの面接のときにいつも持っていた彼女の手帳が残されていました。そこには、こう記してあったのです。

優子 (手紙) 婦警さんは私たちに、不純行為をしてはいけないといったけど、私たちは決して不純なことはしていません。私たちの愛は命懸けの真実な愛でした。あなた方が私たちを無理やり引き離そうとしたことが、かえって二人の仲を離れがたいものにしたのです。そして誰からも祝福されず、受け入れられないと分かった今、私たちは暗く細い道を選ぶことにしました

N 意を決した二人は急行「北国」で故郷を後にし、こうして彼らが「死のハネムーン」と名づけた恋の逃避行が始まりました。最後には死ぬしかないと言う思いからこう名づけたのかもしれませんが、果たして、世間の風は若い二人には強い逆風でしかありませんでした。

繁華街の食堂

友彦 すみません。ごめん下さい。
店主 1 はい、いらっしゃい。
友彦 い、いえ客じゃないんです。表の看板を見て...調理師募集ってあったもんですから。
店主 1 ああ、あれね。きみー。まだ若いね。いくつ？
友彦 二十...二歳です。
店主 1 ほんとう？身分を証明できるもの持ってるの？なんかまだ未成年に見えるけどなあ。うちは未成年はお断りなんだよね。なんか、責任感なくてさ。
友彦 ちゃんとやりますから、ここで働かせてもらえませんか。経験もあります。ですから...
店主 1 だめだめ、うそついてんでしょ？分かるよ、そのくらい。そうやってうちのお金、持ち逃げした奴もいたしね。
友彦 そ、そんな...
店主 1 さあ、帰った帰った。忙しいんだから...あつ、いらっしゃい！

新聞配達所

友彦 あのう、「新聞配達員募集」の張り紙見たんですけど。
店主 2 ああ、そうだけど。
優子 できれば二人で住みこみで働きたいんですけど。
店主 2 ええー！？だめだよ、うちは独身寮しかないんだから。それに君達みたいな若いのを、しかも男女で住ませたりしたら、今いる奴等が連れ込んじゃって、そりゃーもうどうなっちゃうことか...他を当たりな！他を！

和歌山三段壁

N 家を出てから数週間後、東北の片田舎から、どこをどう来たのか、和歌山県の白浜に彼らの姿はありました。若い二人は寄り添うように三段壁の巖頭に立ち尽くしていました。

- 荒波の音強くなって (F . O .)

< 後編 >

和歌山三段壁

優子 ・ ・ ・ いいよね ・ ・ ・
友彦 ・ ・ ・ ああ。
優子モノ こ、こわい ・ ・ ・

N 迫ってくる死の誘惑とは裏腹に、生きることへの執着とでも言うべきでしょうか、一瞬ひるみと恐怖が彼らの足を岩場に釘付けにしました。生きることによってピリオドを打って死のダイビングに踏み切るには彼らはあまりにも若く、健康的でさえありました。土曜日も、はや夕暮れ近く、強い雨足を伴った荒れ狂う怒涛が40メートルの断崖に牙をむいていました。

江見の出張先

牧師夫人 （電話）あなた、いま、三段壁から電話があったわ。そこからすぐに行ってくださいますか。
江見牧師 ああ、わかった。すぐ行く。

N 出張先の私への妻からの電話で、私は急いで現場に急行しました。そこにいたのは、ベアルックに身を固め、青ざめた顔で立ちすくんでいる若い男女でした。

三段壁

牧師モノ （緊張と安堵）まにあった...
牧師 電話してきてくださったのは、あなたたちですね。
優子 はい...（ほっとして号泣）
牧師 恐かったですでしょう。 ・ ・ ・（厳しく）死のうとなんてするからです！...さあ、車に乗って...

N 1時間もして気持ちが落ち着くと、彼らはこれまでのいきさつを語り始めました。一通り聞いた上で私は二人の家族に連絡し、それから故郷に帰る意志のない二人のために、仕事とアパート探しが始まりました。

レストラン白浜屋

白浜屋店長 いくら江見先生の頼みでも、こればかりは本人の頑張りがないことには、私は面倒見切れないよ。白浜屋はチームワークではどんな高級レストランにだって負けやしないんだから。それを乱されることにでもなったら ・ ・ ・

江見牧師　　とすることは、ひとまずは働かせてやってくださるんですね。
店長　　まいったな、江見先生には...はっはっは。住まいも、寮代わりのアパートがあるから。この際保証金も無しでいいですわ。でもあんなボロアパートじゃ、若い二人にはかえってこっちが申し訳ないなあ。
江見牧師　　本当ですか。ほら、君たちもちゃんとお礼を言いなさい。
友彦　　よろしくお願いします。
優子　　ありがとうございます。

N　　若い彼らだけに立ち直りも早いものでした。それから一年後、二人は連れ立って郷里を訪れ、親不孝をわびました。土産代わりに差し出した100万円の預金通帳は両家の人々のわだかまりをいっきに解消させるのに十分でした。ほどなく両親からの手土産を私たちに届けに来た彼らの表情は、一年ぶりの里帰りの成果がありありと表れていました。
それから三年余りの年月があっという間に流れ、彼らには二人の子どもが与えられました。友彦の調理師としての腕も、本人の頑張りもあって日を追ってあがっていきました。わずかの間に、店の中で彼の占める位置は店長に次ぐものになっていました。

レストラン白浜屋

白浜屋店長　先生、よく来てくださいました。
牧師　　長谷川君はがんばっているようですね。白浜屋さんには、何から何までお世話になってしまって、私も心から感謝しています。
店長　　先生もご存知のことと思いますが、私たち夫婦には子どもがいないので養女を迎えていたのですが、もし友彦君が一人身だったら、無理にでも彼を婿養子に迎えていたでしょうね。いずれのれん分けでもしてやるつもりです。
N　　二人が聞いていたら、どんなに感激したことでしょう。そんな彼らが、立派な一人前の夫婦として改まった感じで我が家を訪れたのは、私がしばらく家を留守にしていた時でした。

江見牧師宅

友彦　　お二人には本当にお世話になりました。江見先生はまさに命の恩人です。それに仕事や住むところまで世話していただき、店の親方にもいろいろとりなしてくださったおかげで、親方にも本当にかわいがってもらってます。
江見夫人　あなたたちもよくがんばったわ。白浜屋の主人はいつもあなたたち夫婦を誉め

ていらっしゃるんですよ。

優子 そうなんですか。私にはいつも、口うるさく亭主を大切にしろって・・・そうなら私たちにも一言言ってくればいいのに。

江見夫人 照れ屋なんですよ。あそこのご主人は
三人 (笑い)

友彦 実は、私たちこの白浜を引き上げて郷里に帰ることにしたんです。それで今日は、最後のご挨拶にと思って。

江見夫人 そんな突然に・・・

友彦 でも先生がいなくて残念です。先生と親方は実の親以上の存在でしたから。

江見夫人 どうしてまた・・・

N 妻はびっくりして返す言葉もありませんでした。日ごろの彼らの様子からしてまったく夢にも思わぬことだったからです。

友彦 実は牧場を経営する私の父がリゾート村の湖畔にレストランを作るので、身につけた技術を生かして共同経営しないか、って言ってきたんです。それで私たちも悩んだんですが、父も50歳を過ぎての一念発起だったもんですから、強がっていても実は心細くて、本当に助けが必要なんじゃないかという結論に達して。私はとっくに家を出た身なんですが、やはり、父は父です。

N 周囲の人たちが引き止めるのを振り切って、惜しまれつつ彼らが帰郷の途についてのはそれから数日後のことでした。まさかこれが長谷川友彦との天国での再会までの長い別れになろうとは、この時、知る由もありませんでした。
「去る者は日々に疎し」との諺にもありますように、私ども夫婦も彼らのことをいつしか忘れてました。そんなある日、優子からの電話で知らされたのは、友彦の突然の死でした。開店祝いとして父親から贈られたオートバイで走っていて、スピードの出し過ぎから、ハンドル操作を誤ってガードレールに激突し、脳底骨折で即死したというのです。どんなにかショックだったでしょうに、そのことを伝える優子の口調は意外なほど落ち着いていました。残された子どもに対する責任感からだったのでしょうか。しかし、この疑問はほどなく解けることになりました。彼女からの一通の手紙が届いたのは、この和歌山でも雪が降りそうな寒い2月のある日のことでした。

江見牧師 (優子の手紙を読む)「せっかく先生ご夫妻に助けていただいたのに、期待に沿わずにこちらに来てしまって・・・」

優子 (手紙)・・・期待に沿わずにこちらに来てしまってずっと気になっていました。

しばらくは、再起して世間の人々を見返してやりたいと躍起になっていました。でもこんなことになってしまって、ただ、むなしくてむなしくて、死ぬことばかり考える日々でした。ときには、あの時三段壁で死んでいたら等とすら考えてしまうほどでした。これから子ども二人を抱えてどうなるものかと、お先真っ暗でした。そんな時、ふっと先生から聞いたイエスさまのことを思い出したのです。ともかく教会へと思って、それから先は夢中でした。私って勝手なんですね。いつも困ったときばかり。そんな私ですが、イエスさまは豊かな愛とゆるしをもって迎えてくださいました。あふれる涙の中で、とうとう帰るべきところに帰ったとの、安堵の思いでいっぱいでした。安心してください、先生。イエスさまと一緒にいてくだされば、こんな弱い私でも何とか生きていけそうです。ヨハネの福音書5章24節にある「死からいのちに移っているのです」のみことばって本当なんですね。私、この言葉を一生忘れないで生きていきます。先生、奥様、雪解けになったら一度お伺いしていいですか。

N 私たち夫婦は、胸に熱いものがこみ上げてくるのを覚えながら、彼女を立ち上げさせた聖書の言葉を、感謝とともにひも解きました。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」

< 完 >

参考

江見太郎著『涙をもうぬぐって～いのちの電話は鳴りやまず～』
(いのちのことば社、1990年第1刷...使用は1997年の第7刷...)
“死からいのちへ” pp37～41